

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

あとがきにかえて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2016-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Narangerel メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008592

あとがきにかえて

わたしの生まれた故郷はジリメ盟（現在の通遼市）ホルチン左翼中旗で、むかしの満州国領内にある。村にはフーシंगाと言う名の老人がいた。大地主であるうえ、満州国時代（manju-yin üye）に日本人の創った学校で日本語を学んだため、中華人民共和国成立後、人民大衆からの「専政」を受け、改造・批判されていたことは今もわたしの記憶に残っている。

村の北東へ約3キロ離れたもう一つの村の名は南ハラトド（uridu qaltudu）と言い、そこにはハラトド中学校があり、小学校も併設されていた。わたしの母校である。この学校が日本支配時代に設置されたことは、当時のわたしたちには当然ながら知らされるはずがなかった。ところが、関連記録が同時代の新聞紙『フフ・トグ』（köke tuy）に記されていることが、最近になって判明した。そして、この学校は21世紀に入って、名前を中国風に変えられた。

このように、わたしたち内モンゴル人の消え去っていく歴史、とくに近い過去に経験した歴史を残してくれた記載の多くが、日本語によるものか、または日本支配時代にモンゴル人の手によって行われたことを、さらに、近代における内モンゴルと日本とのかわりを、梅棹の調査資料や同時代の文献から改めて認識したのである。

本書は日本・国立民族学博物館と中国・内モンゴル大学との共同研究プロジェクト「梅棹モンゴル研究資料の学術的利用」を母体にした国際共同研究の成果である。当プロジェクトを進めていくなかで、国立民族学博物館の招へいを受け、日本に1年間滞在して、研究に専念することができた。記して、小長谷有紀教授、久保正敏教授および関係各位に深謝申し上げる。

人間文化研究機構理事・国立民族学博物館併任教授小長谷有紀先生は本書の計画と総括に関してご指導くださり、また、各論文を通読してたいへん有益なコメントをくださった。心から御礼申し上げます。

娜仁格日勒